

大学教育ボランティアを活用した教養教育

-地域に知の循環型社会の構築を目指す新しい形の生涯学習-

大 橋 眞(徳島大学)

中 恵 真理子(徳島大学)

光 永 雅 子(徳島大学)

斎 藤 隆 仁(徳島大学)

廣 渡 修 一(徳島大学)

1. はじめに

超高齢社会の到来に伴い、生涯学習に対する社会の支援体制の構築が重要な課題となっている。その一方で、18歳人口の減少により大学のユニバーサル化が進行するために、それに対応した大学教育へ改革することが求められている。現在の日本は、いわゆる団塊の世代が定年を迎える時期にさしかかっており、地域社会がこの世代の知を活用して次世代の教育に貢献できるような仕組みを創出することが重要な課題である。また、現代社会の諸問題、例えば持続可能な社会の構築とそれに向けた教育プログラム開発など、世代を超えて取り組むべき課題も多い。これまで、経済成長を目標としてきた日本が、これから歩むべき途をどのようにして見直していくのかについては、既存の因習にとらわれない考え方で物事を考える豊かな発想力や、新しい価値

観の創出が必要である。これまで生涯学習を推進する取組と次世代に対する教育支援体制構築を包括的に取り扱う取組は、主として初等中等教育においておこなわれてきた。今後は、このような取組を高等教育に広げて、生涯学習と大学教育を有機的に連携させることが必要であると思われる。そこで今回の取組は、生涯学習の新しい形をモデルとして、大学の教育改革にも活用することを目指して、大学教育ボランティアとして大学教育に対して造詣の深い地域社会人と共に作り上げる授業を、教養教育に取り入れた。

これまで、徳島大学においては、大学開放実践センターの公開講座において生涯教育のための講座を開設してきた。この講座は卒業要件として認定されていないので、履修する学生は極めて限られている。また、大学の教養に関する一部の授業に社会人の受講もあるが、講義形式の授業として実施されているために、社会人と一般学生が交流する機会は限定的である。今回の取組は、社会人と学生が教員と共に一つのテーブルを囲みながら、議論を重ねるために、コミュニケーション力の育成も期待出来る。地域の社会人の勉学や社会活動に対する意欲を学生が感じ取るにより、教養を学ぶことの意義を学生が自ら考える機会となりうる。本稿では、その取組の概要とその効果について検証する。

2. 地域社会人が参画する「学びのコミュニティ」

これまでの大学の通常の授業では、教員から学生への知識の伝達を行うスタイルが一般的であった。今回の取組は、このような授業スタイルとは異なり、学生、地域社会人、教員が同じテーブルについて、意見交換をしながら自らの意見をまとめる過程において、他の学習者からお互いに学び合うというスタイルを基本としている(図1)。このような、社会人が参画して学生、教員が共に学び合う形式の授業を、徳島大学全学共通教育では、平成20年度に前後期合わせて19科目開講した(表1)。これらの授業に参画する大学教育に対して造詣の深い社会人を、大学教育ボランティアとして募集し、応募者の中から23人の社会人を候補者として決定した(図2)。大学教育ボランティアは、身分は大学公開授業の受講生として受講料を徴収しない扱いをしてお

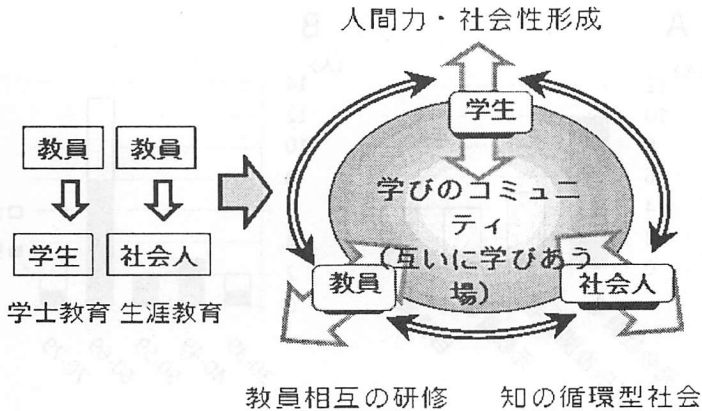


図1 学びのコミュニティ

講義形式で行われてきた学士課程教育及び生涯学習と、これらを融合してコミュニケーションを通じて学び合う「学びのコミュニティ」。

表1 社会人が参画する主な教養授業

社会人参画の授業題目
名著講読*
社会人ボランティアと語ろう
学生と社会人の授業企画ゼミ
社会人と学ぶ日本の文化
アクティブラーニング入門
「つたえること」と「ものづくり」科学で遊ぼう
「つたえること」と「ものづくり」あいのメッセージ
身近にある「ゆったりもの」一方言
埋もれた文化遺産#
国際交流の扉を拓く
空海と歩く一廻路の世界
宇宙を探る
日本語の音声
宗教と科学
神経の世界—動物の行動と精神活動—

(平成20年度に徳島大学全学共通教育において共創型学習科目または教養科目として開講した授業。*は4科目、#は2科目開講していることを示す。)

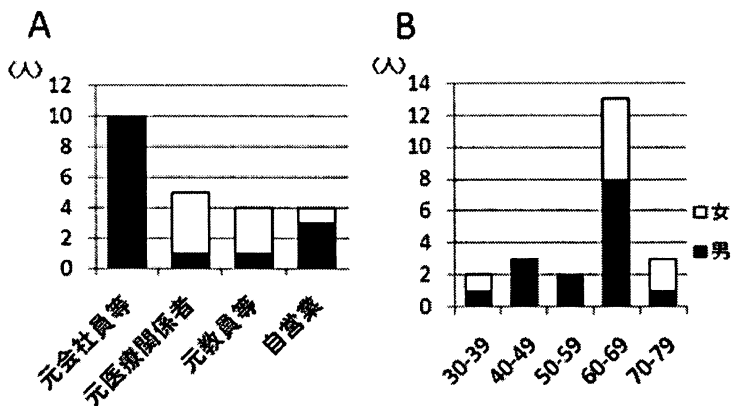


図2 大学教育ボランティアとして取組に参加した地域社会人
A. 授業に参加した地域社会人の職業、経歴、 B. 年齢分布

り、無償で大学教育に協力するボランティアとして位置付けている。このような形式の授業の進め方や内容は、講義形式より多様になるために、社会人、学生共に様々な形式の授業を経験することが出来る⁽¹⁾。

3. 地域社会人の役割

今回の取組では、生涯学習の新しいモチベーションとして、世代の異なる構成員が共に学びながら次世代への知の継承を取り入れることを目指した。社会人の授業における役割として、学生から主体的な発言を引き出すための環境づくりがある。様々な地域社会人が自らの豊富な経験を授業のテーマに関連づけて発言することにより、学生はこれまで考えたことがなかった見方が存在するという新たな気づきにつながることで、授業後の提出された小レポートでわかった。

これまでは、教員がある課題に対して意見を述べた後に、学生の意見を求めても、教員の意見に強く影響を受けてしまい、学生の自由な発言が出来るような環境を形成することが難しいという課題があった。このような授業に

において社会人が参画することにより、教員とは違った視点からの意見を出すために、教員の意見だけでなく多様な意見があり、それぞれの意見が同じテーマに関しても違った視点から物事を見るために生じることにに対する気づきが次の段階の主体的な発言につながっていく。教員と社会人が議論をする中でこの視点の違いにより、話題が様々な方向性に発展する可能性が形成される。時間をかけて議論を進める段階において、学生の主体的な意見が出てきた場合には、学生の意見の方向を重視して、議論の方向性を教員が誘導することが必要な場合もある。あるいは、多様な意見により議論の方向性に多様化が見られた段階で、学生の意見を求めることにより、問題提起が教員から出された時点とは、異なった方向性の意見も述べる事が出来る雰囲気形成される。教員からではなく社会経験が異なった社会人から異なった視点での意見が出されると、学生も多様な視点で自分の考えを織り込んだ意見を発言出来るようになる。また、同年代の学生から出される意見は、他の学生に良い刺激を与え、思考を深めながら自らの考えをまとめていくことにつながる。このような展開は、思考力の育成モデルとして発展出来る可能性がある。さらに、学生は議論の発展に対する社会人の貢献を感じることができると思われる。このようにして、教室の中に立場を超えて討論が進むための環境形成が社会人の参画で容易になる。このような環境を形成する要因は、立場を超えて議論が進む過程として捉えられている公共圏の形成と類似している点があると思われる⁽²⁾。

4. 世代間交流の意義

学生が地域社会人と共に学ぶことにより、人間交流、世代間交流を通じて、人間性や社会性を身につけるだけでなく、地域社会人の持っている良識ある市民としての活動の後ろ姿を見ることにより、自ら教養ある市民の行動について考える機会が出来る。また、地域社会人は学生と共に学ぶことを通じて、学ぶことの意義を考え直し、新たな視点で次世代との関係のあり方を考えるきっかけとなる。このようにして、地域の社会人が、学生と教員と共に学び合うなかで、主体的な生涯学習と大学教育とが一体となり、互いが刺激

する形で知の継承をおこなうことにより、知の循環型環境を構築することを目指す。学生はこのような活動を通じて、地域社会人と世代を超えて話し合うことにより、人間性や社会性を身につけながら、個性に応じた学びのスタイルを構築することが出来る。このような学生が自ら学ぶ自主活動を社会人と教員がサポートしながら、学生の主体的な学びを実現していくための準備段階的な取組としての意義も併せ持っている。次の段階として、社会人と共に課外活動をおこないながら、自主的な学びへと発展することが期待出来る⁽³⁾⁽⁴⁾。

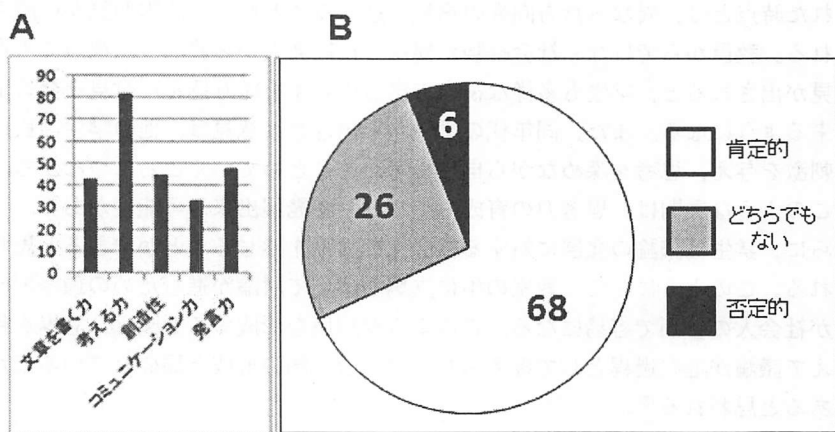


図3 社会人参画の授業（宗教と科学）の受講生に対するアンケート結果
(n=100)

A 授業で向上したと思う能力 B 授業に社会人が参画することの意義

実際に授業を受けた学生に対するアンケート調査では、約7割の学生が、社会人の参加が有意義であったと回答した。また、授業毎の小レポートでも社会人から多様な考え方を学び取ったという意見が数多く出された。また、このアンケートでも身につけた成果として思考力の育成を挙げる学生が最も多かった(図3)。このように、社会人が参画する今回の授業は「対話的コミュニケーションとしての学び」⁽⁵⁾を基盤として、学びに対する新しい意義を見

いだす自己啓発の意味を合わせ持っている。

5. 地域社会人と教員との相互効果

地域社会人は、教員に対しても様々な影響を与える存在となる。社会人は教員の授業での発言に対して、自らの考え方を提示することにより、教員とは異なった視点の存在を学生に与えると同時に、教員に対しても社会人の考え方の視点を提示して、教員の考え方に新たな視点を織り込む働きをすることが期待できる。このように、社会人が教員に様々な効果を与えるのに対して、教員はこのような社会人に対して、さらなる活躍を期待するために、教員と社会人の間に相互の信頼関係が構築されることにつながっていく。このような学習環境において、社会人は自らの学びの成果を授業において生かしながら、次世代への知の継承という目的を生涯学習の中に組入れることが出来る。このようにして、学生、地域社会人、教員による「学びのコミュニティ」が形成されることにより、教員と学生の関係も、通常の両者の関係とは違ったものとなる。三者の間でのコミュニティの形成は、学生と教員の間の垣根を低くして、三者がほぼ同じ立場で学び合う関係に近づけることを可能にする(図1)。社会人の参画により、これまでの教員と学生との関係よりも、少人数のグループでお互いの距離が近い場面を設定することが出来るために、グループとしての一体感が高められ、活発な発言を引き出す効果があることがわかった。

6. 生涯学習と大学教育の融合

これまで生涯学習と大学教育の関係は必ずしも明確に位置づけされて来なかった面がある。大学における社会人向けの公開講座は、どちらかというところ、大学の三つの役割、すなわち教育、研究、社会貢献の中では、大学の社会貢献にもっとも大きな意義があると考えられる向きがあったように思われる。また、生涯学習のなかでの教養講座は、大学における教養に関する授業内容とオー

バーラップする部分があるにも関わらず、お互いに相互乗り入れをして実施する取組はそれほど多くはなかった。

今回の取組は、生涯学習の意義を考えるきっかけを一般学生に与えることを一つの目的としており、生涯学習の一環としての教養教育という立場を取っている。このように今回の取組は、大学教育の中で教養教育を少人数クラスでお互いに意見を出し合いながら、自らの意見をまとめていく過程で、生涯にわたって学び続ける必要性を自ら感じ取るなかで、学生は教養を身につけることとの関連性を意識するようになることを目指した。このような形式の体験型授業は、どちらかという知識の習得よりも知識の活用力をつけることを目標としており、多様な考え方を育む教育に適している。これまで自分の中に築かれていた暗黙の視点に関して、社会経験の豊富な社会人の意見により、多様なものの考えかたに触れることが出来る。このような機会を通じて、これまで自分が持っていた視点が必ずしも唯一の考え方ではないことに関しての気づきが、新たな勉学に対するモチベーションになる（学生の意見）。一方、地域社会人にとって、このような新たな視点の獲得とは別に、学生や教員と共に学び合うなかで、世代を超えたコミュニケーションの機会が出来ることにより、話題を提供するための生涯学習のモチベーションをもつという効果がある（地域社会人の意見）。このように、今回の取組は学生、地域社会人、教員が共に学び合いながら、創造性と思考力を高めることを目的としており、社会人の参加が学びの環境づくりに重要な意味を持っている。

7. 生涯学習と教養教育に対する新しい視点

「我が国の高等教育の将来像」（中教審答申）⁽⁶⁾の中で教養教育や専門教育等の総合的な充実が重点施策として位置付けられている。この答申で謳われている、「多様で質の高い学士課程教育を実現する」ために、教養教育の充実は重要な課題である。教養教育の理念・目的について「新しい時代における教養教育のありかたについて」（中教審答申）⁽⁷⁾では「学問のすそ野を広げ、様々な角度から物事を見ることが出来る能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力」などの見解を出している。さらに、教養教育は、個人が

生涯にわたって新しい知識を獲得し、それを統合していく力を目指すとしている。このように教養教育は生涯学習との関連性が高く、よりよく生きることを目指して、生涯学習に取り組んでいる地域社会人の主体的な学びに取り組んでいる姿が、学生に与える影響は大きい。これまで、同年代の仲間と共に学ぶことに慣れ親しんできた学生にとって、世代の異なった地域社会人と共に学ぶことは、異なった文化的背景をもった学習者が共に学ぶという意義がある。その一方で、「同世代の学習者と共に学ぶだけではなく、世代を超えて知の継承を目指すことが目的で、今回の授業に参加した」と自身の知を次世代に伝える場としての意義を積極的に評価した地域社会人もあり、この社会人には学生の方から「授業中の発言を聞いて感動した」とする感想が数多く寄せられた。また今回の取組は、教養教育のモデルの一つとして、「教養を身につけた社会人として行動できる能力」を身につけさせるための教育としての方法論を検討するねらいがある。授業において学生は、教養を身につけた地域社会人や教員と共に世代を超えて存在する普遍的な課題について議論をするという一つの体験を共有することにより、自然な形で教養を身につけることの意味を自ら学ぶことである。この点に関しても、「地域社会人の教養が感じられた」という感想が数多く寄せられていた。このように、地域社会人が教養教育に関する体験型授業に参画することにより、学生に対して教養に関する認識を持たせる効果があることがわかった。また、地域社会人にとって、今回の取組が、知の継承というモチベーションを行動に移すための場として機能することにより、新しい形の生涯学習として発展することが期待出来る。

8. 学問のバリアフリー化に対する生涯学習の意義

これまで、教養教育のテーマとして、教員の専門分野に近いものが選ばれる傾向にあり、専門分野を超えて教養科目の在り方を議論することが難しいという問題点を抱えていた。今回の取組では、設定する課題を出来る限り教員の専門分野とは異なるテーマとして、より多くの教員が参加して共に学び合うスタイルを創りだすことを心がけた。教員自身も自分の専門分野に必ず

しも拘らないことで、地域社会人や学生も参加して教養教育の在り方に関する議論が成立しやすい環境を作り出す効果が期待できる。今回開講した19科目中13科目は、教員の専門分野とは異なった授業内容である。また、地域社会人が社会の視点から教養と専門の関係について語ることが出来るために、学生にも教養の意味を考えるきっかけを与える。この点についても授業のテーマとして議論する授業（学生と社会人の授業企画ゼミなど）も、教養を考える上で重要な体験となる。また、授業を発展させていくために、体験授業をきっかけとして、専門分野にこだわらない課外学習のオプションを用意するなどの工夫も必要である⁽⁸⁾。

9. 社会の教育力高揚と生涯学習

教養については様々な議論があるが、「我が国の高等教育の将来像」（中教審答申）⁽⁶⁾では教養教育の理念・目的について「学問のすそ野を広げ、様々な角度から物事を見ることが出来る能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力」としている。この概念は、世代を超えて継承されていくべき知という位置付けをすることが可能である。このように、分野や時代を超えて必要となる普遍的なものの考え方や、総合的な判断力を培うことを教養教育の目的とすることで、社会人と学生が教員と共に学ぶことの意味が明確になる。また、生涯学習としての教養と同義的に捉えることも可能になる。今日の日本においては生涯学習に関しての充実は著しく、今日の放送大学や教育テレビやラジオなどマスメディアを通じて質の高い多様な教材が提供されている。各大学から市民に向けた公開講座や地域の一般市民向けの講座が内容も充実してきた。地域の図書館等の整備も進んできており、知識の習得という面では生涯学習の環境整備が著しく進んできた。このようなことから今後大学が支援する生涯学習は、一般社会が担っている部分との棲み分けを図り、大学本来の機能を生かした形にシフトしてゆく必要がある。このように一般社会人が生涯学習として知識を習得する環境が整った反面、これらの知識を活用して自らが活躍できる場はそれほど増加したわけではない。生涯学習の目的を、知識の習得から知識の活用に転換することにより、大学はその

機能を生かしながら、優れた生涯学習の場を提供することが可能となる。大学の場合を提供することにより、地域での生涯学習の活動とは異なった視点で、物事を考えるきっかけになり、知識の活用を進めるきっかけになる。実際に今回の取組は、新しい形式の生涯学習として、参加者の多くはその意義を肯定的に捉えている。特に、若い世代とコミュニケーションをしながら共に学ぶ形態である今回の取組を評価する意見が目立った(表2)。社会人にとって学び合いという世代間交流を通じて、知の継承という目的が設定されるため、今回の取組のように、生涯学習と大学教育の融合をさらに発展させることにより、教養に基づいた知の継承を行うための社会基盤が整備されていくことが期待される。このように、今回の取組に参加した社会人は概ねこの取組を評価しているが、担当する教員や学生教育についての課題を指摘する声もあった(11名中2名)

表2 大学教育ボランティアに対するアンケート結果

- これからの新しい社会に最もふさわしい
- 社会人ボランティアは、自ら学ぶ
- 地域でインクルーシブ教育促進が図れる
- ふれあいコミュニケーションは最高の学習方法
- 共に学び考え話し合うのは、新方向性の力

平成20年度前期の大学教育ボランティアの方に、全ての授業の終了後に行ったアンケートにおける自由記述(一部抜粋)。

10. グローバル化の時代における地域の役割

大学の地域貢献が求められる中で世界のグローバル化が進行してきており、大学と地域社会が連携して、時代に対応出来る地域環境を整備することが必要となってきた。大学と地域で活躍しているボランティア組織と連携することは、このような目的に対して有効に機能すると考えられる。「新しい時代における教養教育のありかたについて」(中教審答申)⁽⁷⁾では教養教育を考えるために重視すべき観点のひとつとして、異文化との接触が重要な意味を持つ

ことを指摘している。一般的に大学においては、日本人学生と共に社会人や留学生が学んでいるが、お互いに交流する機会は必ずしも多い訳ではない。今回の試みは、地域の社会人が加わることにより、身近なところで年代や社会経験の異なる人達が持っている若い世代とは異なった文化を体験し、お互いに学び合う機会を設定することである。これまで自国の文化について深く考えることが無かった学生も、異なった文化的背景を持った人達と交流する中で、自国の文化について考察を深めていくきっかけとなり得る。実際に、幾つかの授業で留学生と共に学ぶ授業も開設しており、世代間交流と共に自国の文化を考え直す機会となっている。このように、異文化交流を深め、お互いに学び合う場面はその地域の知を高めることにつながり、社会の教育力の向上に貢献することが期待される。

11. 地域に広がる知の循環型社会構築を目指して

学びのコミュニティ形成による自主的な学びは、年代差という単純な相違点ではなく、経験を通じた学びの違いにより、物事を考える視点の置き方が異なることへの気づきに繋がる。この過程を通じて視野が広がるために、新たな課題を見つけることが出来る。このように生涯学習の発展のためには、世代を超えた多様な人材が共にお互いに学びあう場を設定することが重要である。また、思考の原点の違いを感じ取ることが出来れば、物事を総合的に見る能力を涵養する機会になり得る。このような、考え方の相違点が存在すること自体が、思考経路の形成過程を考えさせる新たな課題となりうることに気づく可能性もある。時代を超えた普遍的な知を求めるという行為は、結果として数多くの図書に巡り会うきっかけになる。授業後のアンケートにおいても、学生・社会人共に授業で共に学びあうことの意義と異なる視点の存在への気づきという効果が確認された。このように学生が、地域社会人の教養を認識し、多様な視点と教養を身につけることの意義を認識したことから、今回の取組は世代を超えた知の継承による知の循環型社会を構築するモデルになることが期待される。また、学生、地域社会人、教員による「学びのコミュニティ」は、学びの過程そのものを新たな課題として設定できるために、

課題そのものが、新たな課題を提供する循環を生み出す効果が期待できる。生涯学習の目標の一つとして、形成された学習集団が自ら次の目標を設定して、自己発展的に組織活動を行いながら、学びのテーマを広げていくことも可能であろう。

12. おわりに

これまでの大学での生涯教育の場での学生との交流は、英会話や体育系の授業や、大学の公開講座などが主であった。また、地域学系の学部において、学生が地域に出向いて地域の人から学ぶ体験型授業が開講されていた。今回の取組は、大学の教養教育において社会人がボランティアとして参加し、学生と議論を通じてお互いに学び合うということを基本としている。生涯学習者にとって、教えることと学ぶことを同時にこなう新しい形の生涯学習の場が形成されることが期待される。また、同時に教養教育に関しての学生教育に有用な環境が出来る。また、生涯学習と学生教育を通じて地域と地域社会人共に作り上げる知の拠点としての大学の発展が期待されよう。そのためには、生涯学習と大学教育を融合させて発展させて行く方策を、様々な角度から検討して実現していくこと望まれる。

【謝辞】

この取組に、様々な形で御協力をいただいた地域社会人の方々に感謝する。

注記・引用文献

この取組は平成20-22年度に、文部科学省質の高い大学教育改革プログラム「地域社会人を活用した教養教育」の補助を受けた。

- (1) 大橋 眞, 斎藤隆仁, 佐藤高則, 中恵真理子, 田村貞夫「ものづくりと大学初年次教養教育における創造力育成プログラム」『大学教育研究ジャーナル』第4号, 2007年, pp. 1-12
- (2) 細谷貞雄, 山田正行(訳)『公共性の構造転換』未来社, (Habermas, J 1990年,

Strukturwandel der Öffentlichkeit : Untersuchungen zu einer kategorie der burgerlichen Gesellschaft Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main) 1994年, pp. 52-55

- (3) 光永雅子, 中恵真理子, Steve T. Fukuda, 斎藤隆仁, 金成香奈子, 的場一将, 大橋 眞「学生・職員・教員参加型の教養教育FD活動-UD (University Development) 活動としての意義」『大学教育研究ジャーナル』6号, 2009年, pp. 98-102
- (4) 大橋 眞, 中恵真理子, 光永雅子, Steve T. FUKUDA, 斎藤隆仁, 菊池 淳, 香川順子, 廣渡修一「大学教育改革と教養教育-地域社会人活用による知の循環型社会構築に向けて」-『大学教育研究ジャーナル』 6号, 2009年, pp. 88-97
- (5) 柴田義松(訳)『思考と言語』上明治図書, (Vygotsky, L.S. 1934年) 1962年, pp. 255-274
- (6) 文部科学省 中央教育審議会答申 「我が国の高等教育の将来像」2005年
- (7) 文部科学省 中央教育審議会答申 「新しい時代における教養教育のありかたについて」2002年
- (8) 大橋 眞, 斎藤隆仁, 佐藤高則, 中恵真理子, 田村貞夫, Loise Mamaena Idu 「共創型授業における社会人活用の展開」『大学教育研究ジャーナル』5号, 2008年, pp. 30-38